The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	19世紀パリのサロン・コンサート（1815-1848）：音楽のある社交空間のエレガンス
Author(s)	福田，公子
Citation	大阪大学，2009，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57889
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【48】

氏　　名	福（ふく）　田（だ）　公（きみ）　子（こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２３２７１　号
学位授与年月日	平成21年４月20日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	19世紀パリのサロン・コンサート (1815-1848)－音楽のある社交空間のエレガンス－
論　文　審　査　委　員	(主査) 教　授　根岸　一美 (副査) 教　授　上倉　庸敬　　教　授　和田　章男　　准教授　伊東　信宏

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は19世紀前半のパリにおいて王侯の宮廷や貴族の館を中心に繰り広げられた「サロン」における音楽活動の状況を解明することを目指し、その意義を論じた研究である。本文（Ａ４判468頁）のほか、１）本論文の基礎資料となる音楽新聞『ガゼット・ミュジカル』に掲載されたコンサートの基本情報を編纂した「19 世紀パリのサロン・コンサート（1834-1848)」と、２）これらのコンサートに出演した音楽家たちのうち、日本で出版されている音楽辞典等に掲載されていない人物についての伝記情報をまとめた「19 世紀サロン音楽家辞典」からなる『資料集』(同 73 頁）が、別冊として添えられている。

本文は、序章と、第Ⅰ～Ⅳ章、終章から構成されている。「序章」では、復古王政開始期（1815 年）から二月革命（1848 年）までのパリにおけるサロン・コンサートが、音楽史およびサロン史の先行研究において十分に扱われておらず、研究の対象とすべき問題であることを論じている。そして、研究を進めるための視点として、１）貴族性の基本となる「芸術保護」の思想が「サロン・コンサート」の基盤を形成し、時の音楽文化に大きく貢献しえたこと、２）「サロン・コンサート」のうち、最良のものは「公開演奏会」を内容的に大きく凌駕したこと、３）「サロン・コンサート」が、音楽史面で果たした役割があったこと、という３点を提示している。序章ではさらに、『ガゼット・ミュジカル』をはじめとする基礎資料を紹介し、研究にとっての有効性を説いている。「第Ⅰ章：貴族とサロン文化」では、第１節で、フランス貴族の生活、社会および文化について、サロン文化が開花したとされるルイ 14 世の時代から本研究の対象とする時代の直前までの状況を取り上げることにより、第Ⅱ章への前提となる総合的な考察を行っている。第２節では、19 世紀前半期のサロンについて全般的な状況の解説を行い、この時期のサロンが、１）以前のように上流階級とくに貴族の夫人たちによるものだけに限定されず、男性貴族や上流ブルジョワ階級の人々や市民階級に属する芸術家なども社交的集まりを開催するようになったこと、２）文芸に加えて政治的討論が中心的話題となってきたこと、３）音楽活動、とくにサロン・コンサートが非常な隆盛を見たこと、を指摘している。「第Ⅱ章：パリ社交界のサロン・コンサート」は、本論文の中心的な部分であり、94 頁から 352 頁までと、分量的にも最大の記述内容となっている。ここでは復古王政宮廷、七月王政宮廷、オーストリア大使館の音楽夜会、メルラン夫人をはじ

めとする貴族夫人の音楽夜会、男性貴族と上流市民のコンサート、さらに、音楽家および音楽関係者のサロン・コンサートについて、『ガゼット・ミュジカル』の掲載記事を中心に、克明な情報の掘り起こしを行っている。「第Ⅲ章：『ガゼット』に見る社交界の音楽と音楽家」では、作曲家を中心とする音楽家の活動の面からサロンの状況を考察し、1）サロン・コンサートでは、イタリア・オペラを代表するロッシーニ、ベッリーニ、ドニゼッティが、特に好まれた作曲家であったこと、2）ベートーヴェン、ウェーバー、シューベルトをはじめとするドイツの作曲家の作品が広く愛好されたこと、3）リスト、タールベルク、ショパン、モシェレスなどを中心とするピアノ音楽の本格的流行が見られるようになったこと、などの結論を導き出している。「第Ⅳ章：19 世紀サロン・コンサートの特徴と役割」では、サロン・コンサートが、公開演奏会に比べて、1）より良質の演奏を提供し、2）優れた新進演奏家を紹介し、3）プロの演奏家とアマチュアとの共演をもたらし、4）演奏会のみに終わるのではなく、社交精神に基づく活発かつ有意義な意見交換の場をも提供しえたであろう、等の長所を有していたと述べている。そして「終章」では、サロンという演奏会の形式が「時の音楽文化の推進とパリ文化社会の発展の上で果たした役割と意義を提示した」ことを明らかにした点に、本論文における研究の意義があったと述べ、サロン・コンサートに見られる「高貴な精神」、そして「ノブレス・オブリージュ」への共感を熱く語り、結びとしている。

論文審査の結果の要旨

本論文が扱っている時代は、一般に、ベートーヴェン、シューベルトをはじめとするドイツ人作曲家が活躍し、あるいは彼らの作品が評価された時代として知られており、それに対してパリを中心とするフランスの音楽の状況については、いくつかの作品を除けば、あまりクローズアップされることのなかった時期であったと見なされている。本論文は、このようないわば隠されていた面に注目し、数多くのフランス語による原資料に取り組むことにより、当時の音楽状況に関する百科全書的な知の獲得に邁進した仕事であると評しうる。結果として得られたデータは膨大なものであり、それらを提示することによってフランス文化史および音楽史の記述の新たな可能性を示しえたことは十分に評価されうる。しかしながら、序章をはじめ、論文の随所において、サロンの意義や魅力をいわば予め掲げ、そうした価値意識のもとに、個々の事例における検証を目指しているような論理展開が目立ち、事柄そのものの観察とそこから帰納されてくる認識への歩みがしばしば欠落しているように見られるのは、本論文の欠陥として指摘しておかなければならない。また、重要な人物についての記述が時折あまりに長く続くが、初めから好ましいとされた性格像のサンプルが繰り広げられている感を否めず、読む者に緊張なき持続を強いる結果ともなっている。本論文に関する口頭試問は 2009 年２月 24 日（火）、非公開でおよそ２時間にわたって行われ、以上の基本的な問題についての論議のほかに、以下の指摘も行われた。1）『ガゼット・ミュジカル』に基づく部分の記述は提出者の想像力もあいまって生き生きとしているが、背景となる全般的な歴史記述の部分は概説書に頼りすぎている、2）資料となるメディアの社会的位置や性格についての批判的な受けとめが欠けており、個々の記事の執筆者に対する関心も乏しい、3）サロンの文化や音楽についての近年の重要な日本語文献への言及が欠落している、4）キーワードとなっている「ノブレス・オブリージュ」を一律に自明なものと評価している反面、そのような範疇に属さない社会階層や異なる価値観を持っていたかもしれない人々への視点を欠いている、5）サロン・コンサートの独自性や意義を論じるためには、やはり公開演奏会との比較も必要であったであろう、等々である。その他、注の扱いや人名のカタカナ表記などについてもいくつかの指摘が行われた。しかしながら、本論文がサロンならびにサロン・コンサートという文化現象の意義を探究する営みを通じて、西洋音楽社会史研究の新たな視座の可能性を示すとともに、後世の研究者たちに対しても有効な数々の情報を準備しえた功績はきわめて大きい。かかる成果により、本論文を、博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。